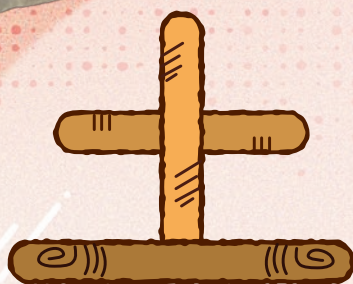


発掘現場から

文化力

POWER OF
CULTURE

★
仙台市文化財パンフレット第85集



★
から

はじまる

はじまる



祈りの

埋蔵!

文化財



カメ



トリ



イヌ



仙台市教育委員会

【仙台が誇るハート形土偶(大野田遺跡)】

大野田遺跡は、太白区大野田に位置する縄文時代から古代にかけての大規模な集落遺跡です。周辺には、伊古田遺跡や川前遺跡のほか、下ノ内遺跡、下ノ内浦遺跡、王ノ檀遺跡など縄文時代の遺跡が集中しています。いずれも、名取川と笹川の洪水によってできた、周囲より小高い地形の上に所在しています。

1993～1995年に行われた発掘調査では、縄文時代後期(約4400～3200年前)の墓と考えられる配石遺構などが見つかりました。また、日常使われた土器や石器のほか、石刀などの特殊な遺物が多く出土していることから、大野田遺跡は墓地と祈りの場が一体になった場所だったと考えられます。

調査成果の一つとして、300点を超える大量の土偶(破片含む)が出土した点が挙げられます。これは宮城県内の発掘調査では最多の点数です。大野田遺跡の土偶は、ハート形の頭に長い胴、ガ二股の短い足といった特徴があります。特に頭の部分は顔が前面に飛び出しており、仮面をつけているようにも見えます。これらの土偶は、よく見ると目や鼻、口の形がそれぞれ違っており、それぞれ個性的な顔つきをしています。中には、自分や友達に似ている顔があるかもしれませんね。



ハート形土偶の頭部が出土している様子



川原石を並べてつくられた配石遺構

【国内最大級の土偶(伊古田遺跡)】

伊古田遺跡は、太白区大野田に位置する縄文時代から古代にかけての集落遺跡です。1984年に行われた市営地下鉄南北線建設に伴う発掘調査では、縄文時代後期の様々な遺物が出土しました。中でも全身の姿がわかる4点の土偶が特徴的です。最大の土偶は立った姿(立像)のもので、長さ41.4cmあり国内最大級の大きさを誇ります。立像の土偶は、前方に突出した顔、いかり肩、細長い胴、大きく踏ん張った脚という共通した特徴を持っています。また、座った姿の土偶が1点出土しています。うずくまっている姿で膝を腕で抱えているような姿勢をしています。背中には格子状の文様と背筋のような線が表現されています。



この姿が何のポーズなのかは分かっていません。お産の姿、まつりの場での姿勢、埋葬時の姿など諸説あります。その意味について考えてみるのも面白いかもしれません。



最大の土偶と土器が出土している様子



座った姿の土偶

さいし 【祭祀遺物の宝庫(川前遺跡)】

川前遺跡は、太白区富沢に位置する縄文時代後期から晩期(約4400～2400年前)にかけての集落遺跡です。2015年に行われた発掘調査では、縄文時代後期の竪穴住居跡と縄文時代後期から晩期に堆積した層から遺物が大量に出土しました。

遺物としては、土器、石器などの日用品の他、複雑な文様が描かれた土器、石刀、土偶、岩偶、岩版などの非実用的な遺物が数多く出土しています。また、川前遺跡ではこれらの遺物を含む層が何層にも重なっていることから、比較的長い間、祭祀的な行為が繰り返し行われていたと考えられます。

祭祀に使われたとみられるこれらの遺物は、精巧な土器や遮光器土偶で知られる、東北地方の縄文時代晩期を代表する亀ヶ岡文化に属するもので、市内では極めて出土例が少ない貴重な資料です。



岩偶が出土している様子



土偶が出土している様子

【所在地】太白区西多賀・大野田 【年代】古墳時代中期～後期(約1,500年前)



埴輪が出土している様子(大野田古墳群37号墳)



大野田古墳群11号墳から出土した埴輪



原遺跡6号墳から出土した埴輪

仙台市内で古墳が造られ始めたのは古墳時代前期末(4世紀末)です。その頃に築かれた遠見塚古墳(若林区遠見塚)は全長110mの前方後円墳で、畿内の大和政権と関係を持った首長が仙台平野に現れたことを示しています。

古墳時代中期後半(5世紀後半)頃になると埴輪が並べられた古墳が造られるようになります。古墳時代中期に造られた裏町古墳(太白区西多賀)は全長約50mの前方後円墳で、埋葬施設から青銅製の乳文鏡にゅうもんきやうと鉄鏃、刀子、櫛などの副葬品が出土しています。墳丘からは円筒埴輪と朝顔形埴輪が出土しています。

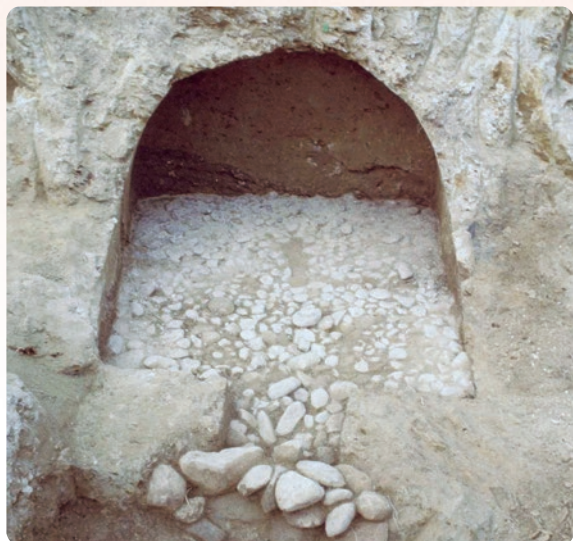
古墳時代中期後半から後期初頭(5世紀後半～6世紀前半)に造られた大野田古墳群(太白区大野田)では、45基の古墳が見つかり、円筒埴輪を中心に、鳥形埴輪や家形埴輪などの形象埴輪けいしやうも出土しています。中でも11号墳から出土した家形埴輪は、埋葬施設のある墳頂に置かれることが多く、埋葬された人の魂が宿る場所だったという説があります。

仙台市内から出土する埴輪には、大きく分けて、半円形のスカシ孔あなを持つ「五反田古墳系列」と、円形のスカシ孔あなを持つ「富沢窯跡系列」の2種類があり、前者は原遺跡(太白区西多賀)など、後者は大野田古墳群などで見つっています。このことは、異なる埴輪製作技術を持った2つの工人集団が、この地域に存在した可能性を示しています。このうち富沢窯跡系列の埴輪は、今のところ東北で唯一調査された埴輪窯跡である、富沢窯跡(太白区三神峯公園内)の埴輪工人によって作られたと考えられています。

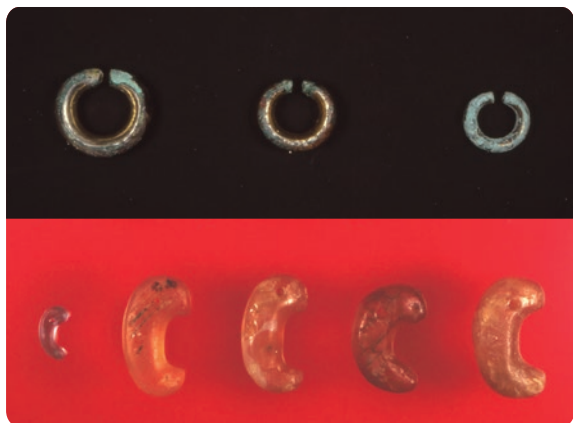
これらの古墳に並べられた埴輪には、埋葬された人の魂を静める祈りが込められているのかもしれません。



茂ヶ崎横穴墓群の様子



茂ヶ崎横穴墓群10号墓の内部の様子



茂ヶ崎横穴墓群から出土した金環と勾玉

よこあなほ
横穴墓は、丘陵の斜面に掘られた横穴に亡くなった人を埋葬した墓です。主に飛鳥～奈良時代（7世紀～8世紀）に営まれました。仙台市内では大年寺山・愛宕山（太白区）などの斜面に集中しています。

も が さ き
中でも、茂ヶ崎横穴墓群（太白区茂ヶ崎）は、大年寺山の斜面につくられた飛鳥～奈良時代のお墓の集まりです。1988年の工事中に見つかり、斜面にそって25基が確認されました。この横穴墓群から出土した土器や副葬品は、同時期に造営・運営された郡山官衙（役所）にかかわりのある人たちが造った可能性を示しています。また、横穴墓の形状や大きさの違いは、埋葬された人々の身分や時期の差を反映していると考えられています。

横穴の中からは、土器のほか金環と呼ばれる金製の耳かざりや、首かざりの一部とみられる勾玉や管玉などが見つかりました。特に首かざりに使われる玉は400点以上も出土しました。また、刀や馬具も出土しており、亡くなった人が大切にしていたと想像されるものや、仕事に関係する道具などから、その人の暮らしぶりをうかがい知ることができます。

副葬品は、単にきれいだから入れられたのではなく、亡くなった人の力や身分をあらわすとともに、埋葬された人を守るお守りのような意味が込められていたとも考えられます。これらの出土品からは、亡くなった人を丁寧にまつり、先祖を大切にしようとする祈りの気持ちが伝わってきます。

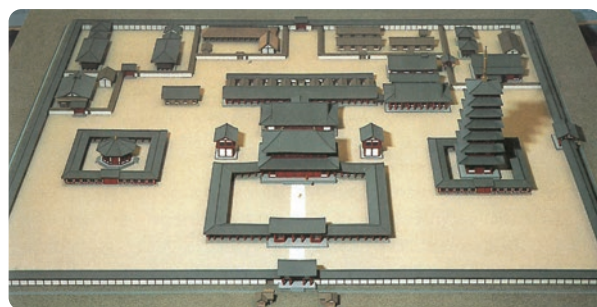




郡山廃寺跡の建物配置



陸奥国分寺南門跡の発掘調査状況(2005年)



陸奥国分寺跡(復元模型・仙台市博物館所蔵)

こおりやま はいじ 【郡山廃寺跡】

畿内で中央集権国家づくりが始まったところ(飛鳥～奈良時代)、東北地方の北側は蝦夷^{えみし}と呼ばれた人々が暮らしており、国家の範囲外とされていました。そのため、中央政府は陸奥国(東北地方太平洋側)を治める拠点として、現在の太白区郡山に役所(官衙)^{かんが}を設置しました(郡山遺跡)。この役所は、多賀城に移転する前の陸奥国府^{むつこくふ}だった時期もあり、陸奥国を統治する拠点として、蝦夷との交渉なども行っていたと考えられます。

郡山廃寺は、そうした古代国家の役所に付属する寺院として造営されており、仏教の力で陸奥国の統治がうまくいくように祈っていた可能性が考えられます。郡山廃寺は、陸奥国府が多賀城に移ってもしばらく存続しており、多賀城の付属寺院である多賀城廃寺とともに、古代陸奥国における国家的な祈りの場であったと考えられます

【陸奥国分寺跡】

陸奥国府が多賀城に移ってしばらく経った頃、聖武天皇^{しょうむ てんのう}の命で全国に国分寺と国分尼寺^{こくぶんじ こくぶん に じ}がつけられました。陸奥国では、現在の若林区木ノ下に陸奥国分寺・国分尼寺が建立され、現在見つかった中では最北の国分寺・国分尼寺となっています。

陸奥国分寺・尼寺には仏教を通じて国家の安定を祈る役割があったとみられ、壮大な伽藍^{がらん}がつけられました。その頃に郡山廃寺は活動を終えたようで、古代陸奥国での国家的な祈りは、陸奥国分寺と多賀城廃寺が担うようになったと考えられます。

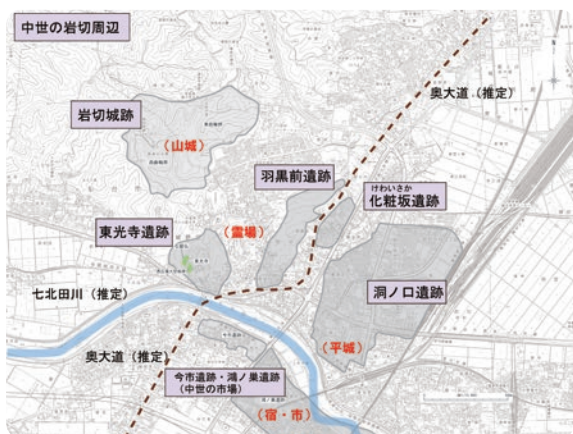




東光寺遺跡西平場の板碑



洞ノ口遺跡から出土した木製品



関連遺跡の位置

宮城野区岩切には中世(鎌倉～戦国時代:12～16世紀)の重要な遺跡が密集しています。それは、当時この地域が「奥大道」という鎌倉からの幹線道路と、海につながる水上交通の幹線である七北田川が交差する交通の要衝地だったためです。

七北田川右岸の鴻ノ巣遺跡には市場があり、左岸の東光寺遺跡は、墓所、霊場として岩切周辺の武士や庶民たちの祈りの場所でした。また、背後の山上には大規模な山城の岩切城があり、山麓の洞ノ口遺跡には武士の屋敷がありました。

東光寺遺跡の発掘調査では、中世寺院に伴う階段や井戸跡などが見つかり、中世陶器や寺院の建物に使われていた軒瓦や鬼瓦などが出土しています。洞ノ口遺跡の発掘調査では、堀や土塁に囲まれた多数の建物跡など城館に関わる遺構が見つかり、塔婆や地藏菩薩像など信仰に関わる木製品の出土が注目されます。

現在の東光寺境内には鎌倉時代から南北朝時代(12～14世紀)にかけての石窟仏(崖を彫り込んで仏像を刻んだもの)や122基もの板碑が残っています。これらは自分や家族の死後の安楽を願い作られたものです。

出土遺物や板碑からは、より死が身近にあった当時の人々が、公的な権力に頼らず自らの幸福を願う自力救済という考えを強く持っていたことがうかがえます。



「ミニチュア呪物」とは、恐ろしい「のろい」ではなく、ここでは人々がさまざまな願いを込めた「まじない」の性格をもつ小さなモノという意味で使っています。

江戸時代の遺跡を発掘調査すると、よく人や動物の形をした小さな土製品が出土します。人の形をしたものには天神・七福神などがあり、動物ではサル、イヌ、キツネ、イノシシなどが比較的多くみられます。単なるこどものおもちゃにも見えますが、これらの遺物には当時の人々の願いや思いが込められています。例えば、天神は勉強の神様、サルはいわゆる三猿（見ざる聞かざる言わざる）として、キツネは神様の使いとして、イヌは安産や子孫繁栄の意味があり、こどもの守り神ともされたようです。

また、江戸時代の終わり頃のミニチュア呪物として豆甕まめがめがあります。高さ3～4cmの小さな陶器ですが、仙台城跡を中心に市内から50点ほど見つっています。大堀相馬焼（福島県）の製品が多いですが、近世の堤町

でも作られていた可能性があります。これらがどのように使われたのかは謎ですが、仙台城二の丸跡からは「御落成」と墨書された素焼きの豆甕が出土しており、建物の新築時のお祝いに使われた可能性があります。また、幕末頃の民家の屋根裏からワラきりごめやきに包まれて見つかった豆甕の事例があります。切込焼（加美町）の製品で中に米粒が詰められた例もあることから、豊作や家の繁栄を願うまじないの道具だった可能性があります。

一方、近代になると、青葉区堤町で「カメッコ」という手のひらサイズの甕が作られました。市民はこどものせきがひどい時にこれを買ひ、治ると数を倍にして神社に納めたそうです。

小さな甕に祈りを込める習慣は、遅くとも幕末頃には仙台で流行していたようです。はじめは仙台城や武家屋敷で行われていたまじないが、明治以降、次第に意味合いが変化しカメッコとして仙台市民の間に広まったのかもしれませんが



仙台市内の遺跡から出土した豆甕



古民家から見つかった豆甕
（加美町切込焼記念館提供）

